
ワイルドヘブン

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワイルドヘブン

【NZコード】

N5124A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

野性の天使エヴァとその他大勢によるファンタジーっぽい話。

豆腐に箸で十字に切り込みを入れる。醤油を控えめに垂らして、葱を豆腐と同じぐらいの質量乗せる。

エヴァのいつも食事風景は、この儀式から始まる。

「いつもても、それは豆腐じゃなくて葱がメインだろ？・味が前菜みたくないてるよ」

「いいんだよ。豆腐には葱つて面から言つだらう」

「言わねえよ」

慣れてしまつたのか、それほど違和感を感じなくなつてゐる自分に恐れを感じる。

エヴァが世間知らずなのは今に始まつたことではない。

それはエヴァが人間じゃないからかもしれないし、エヴァを教育したヤツが悪いのかもしれない。

エヴァは野性の天使で、俺の家に居候している。

天使だからつて羽が生えてゐるとか安易な想像は止めてほしい。

何か使命がある訳ではないし、むしろ仕事はしていない。現フリー ター。

自称

「天使」

。ちょっと頭のおかしな少年だといつていい。始めにエヴァに出会ったのは、渋谷ハチ公前。オレは、恋人の早苗を待っていた。デートに近い誘いだつたと思つ。

遅れてきたオレに早苗は言つた。

「彼、天使なんだつて。」

「…？？」

見るとそこには十一歳～十三歳くらいの白い髪の男の子がいた。

「天使？」

「うん。 そこでさつき拾つたんだ」

犬猫じやあるまいし、人間が捨てられている訳がない。天使なら…？

段ボールに太いマジックで、

「天使です。もらつてやってください。」

と書きなぐつてある。

「…誘拐？ありえないし…」

「ねえ、天使つて何食べるのかなあ？」

「早苗…。ちょっと…」

早苗を物陰まで無理矢理ひっぱっていく。

「何よ。まだまつ星聞じやない。それには人が大勢いるし…」

「違うって。本当にわざのガキが天使だと思つか？」

「だつて書いてあつたし…」

「たぶん、アレは何かの例えで、天使のよつて可憐いとか…そういう意味だつて。」

「そつなの？」

「交番にでも預けて、わざと逃げよつぜ。」

オレは面倒に巻き込まれるのが嫌だつた。

しかし、その時オレはすでに面倒に巻き込まれていたのだ。

「嫌よ。私が飼うんだから」

「飼う…とか、そつこうのじやなくて。親御さんとかも心配してゐるだろうし。」

ふと、わざの少年が立つていた場所を見る。

少年は、ハチ公の背中に乗つてやがつた。

周りの人間の視線を浴びまくつている少年に向かつて早苗が手を挙げる。

周囲の人間の目がこぢらに移る。

確實に、あの迷惑な少年の保護者だと思われただろう。

このまま立ち去ることは難しい。そう判断したオレは早苗に手をつながれた、天使と共に、ハチ公前を後にした。

できるだけ人気のない喫茶店を選んだ。

灰褐色の古い建物で、全体的に薄暗い。

「話つて何よ…」

何を勘違いしたのか早苗の顔が緊張していた。

「IJの子をどうするのかつて話だよ。」

「だから私が飼つていってるじゃない。」

オレは少し考えて。

「ヒト一人飼うのにどれだけの工サ代が必要か分かってるのか?」

「…それは…」

本当はそういう問題じやないんだけど、今は何でもいいから早苗を説得するしかなかつた。

「教育費だつて今は馬鹿にならないんだ。大学まで行かせようと思つたら…五千万ぐらい必要だ。」

「……」

「それに、飼い主には生半可な責任じや、なつてはイケナイ。この

子の面倒を一生背負つていかんきやならないんだぞ？それでもいいのか？」

「…………」

ひどく落ち込み塞ぎ込んだ早苗を見て、良心が痛んだ。言いすぎたかもしれないと反省した。

沈黙が続き、アイスコーヒーの氷が鳴った。

天使は、オレンジジュースの氷をねぶつている。

「…分かつた…」

内心ホッとした。分かつてくれたのかと…

「分かつたわ…私たち…結婚しましょ。」

なぜ…早苗の思考回路はもしかしたら宇宙の仕組みよりも複雑なかもしれない。

「この子を育てるには母親だけじゃなく父親の力が必要なのね……」

アイスコーヒーの氷が鳴った。

説得が失敗に終わった。

早苗の中では既に決意は固まつてこゆるよつだ。

オレと早苗はなぜか婚姻届なる物を役場に持つて、晴れて夫婦となつた。

そして、21とつゝ若さで子供まで授かつた。

少年の名前は

「エヴァ」

。なぜこんな日本人離れした名前になつてしまつたのか…今でも理解できない。

たぶん、その様な手続きがオレの知らないウチに行われていたのだ
らう。

「なあ、早苗…」

「何？あなた。」

早くも適応していれる所が早苗の凄い所だらう。

「エヴァの事なんだけど…」

「どうしたのよ改まつた顔して。もしかして…」

早苗の妄想回路が働かないウチにオレは切り出した。
「ア、イツ、天使なんだよなあ」

「そうよ…今更何言つてんの」

「ホントに？」

なぜか早苗は目を泳がしてくる。

オレは、あることに気付いた。天使といつのは、たぶん愛を運ぶ者だ。

そして、オレ達は結婚した。

最初はエヴァが本当に天使だという可能性も考えた。

しかし、あまりにも早苗は準備が良すぎるので。

「これ、全部お前が仕組んだのか早苗？」

できるだけ真剣な顔で早苗を問いつめる。

「やつだとしたら？離婚？民事訴訟？」

「いや、まあ…。」

オレは上手く言えなかつた、早苗の事は好きだつたし夫婦になれたのは正直に嬉しかつた。

「それは困る…民事訴訟は…」

離婚は…とは言えない。

全て陰謀だとしても、やつじやなことしてもオレは幸せだと思つ。

「エヴァ、葱残しちゃだめよーー。」

早苗はそれなりに様になつてゐる。オレはまだどうが…。

「やうだぞエヴァ、葱は体に良いんだ、いっぺん食えよ。」

豆腐に箸を突き刺して、オレ達はきこちない夫婦生活と頼りない子育てをスタートさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5124a/>

ワイルドヘブン

2010年10月28日08時06分発行